

第5回 津山市小中学校の将来構想検討委員会会議録 【概要】

○日時 令和4年7月4日（月）10:00～12:00

○場所 津山市議会棟 第一委員会室

○出席者

・津山市小中学校の将来構想検討委員会委員 8名

委員長 高塚成信（岡山大学学術研究院教育学域教授（特任））

副委員長 森本宏伸（津山市立鶴山小学校長（津山市小学校校長会））

委員 宮本有二（退職校長 現美作大学非常勤講師）

大山正志（津山連合町内会副会長（東苫田支部長））

松田和也（津山青年会議所）

櫛田晃稜（津山市PTA連合会副会長）

神田智弘（津山教育事務所次長）

菅原雅子（津山市立加茂中学校長（津山市中学校校長会））

事務局 教育長、教育次長

教育委員会関係課長等8名

1. 開会

2. 協議（1）

（委員長）

第5回目の委員会では、前回に引き続き、学校教育の体制整備の各方策について、それぞれのメリットデメリットを協議する。

あることを得るといふことはあることを失うことでもある。選択肢のメリットデメリットは見えづらく、メリットと思われるものも別の視点から見るとデメリットに、デメリットと思われるものも視点を変えると、メリットになる。そのため、選択肢のメリットデメリットを特定しても、何が導き出せるのか。非常に困難な選択になると感じている。

まず、小中一貫型小学校中学校と義務教育学校の違いについて事務局より説明願いたい。

【事務局説明】

○第4回委員会のまとめ

・過小規模校への対応策

○小中一貫型小学校中学校と義務教育学校の違い

・教職員組織の違い

- ・小中一貫教育の制度化における3類型
- ・学校教育の体制整備の方策一覧（免許の取得、財政的要因）
- ・小中一貫型小学校中学校と義務教育学校の各事例

（委員）

2つの制度の大きな違いは、教職員組織が1つであるか、小中学校で分かれているかということ。そして、そのことがプラスなのかマイナスなのかは十分検証されていない。

また、先ほど口頭説明があったものを一覧表に入れないと資料として残らない。

施設形態では一体型、隣接型、分離型があり、津山市の状況を考えると、小学校1と中学校1で一体化するパターンと、複数の小学校が1つの小学校に統合した上で中学校と一体化するパターンを想定することとなる。さらに、一体型、隣接型、分離型と組み合わせると6通りがある。6通りのうち小学校1と中学校1で一体化するパターンと、複数の小学校が1つの小学校に統合した上で中学校と一体化するパターンで、小中一貫型小学校・中学校化と義務教育学校化を分ける4通りは明確に区別して議論する必要がある。その上で遠距離通学の距離数も分けて記載する必要がある。

施設改修についても小中一貫型小学校・中学校化する場合に、どの範囲の改修を想定しているのか、新しい学校を建設するのか、その条件の設定が一覧表に必要なになる。

（委員）

事務所管内の取組を紹介する。

新庄村では、小中一貫型小学校・中学校で、小学校と中学校の職員室は1つ、校長は各1人の配置となっている。指導方法を統一する研修は進んでいる。職員会議は別々に、また合同でも行われている。

美咲町では、義務教育学校化を進め、柵原では新たな学校を建設予定。教職員の配置及び運営方法は検討中である。

（委員）

一覧表では、メリットデメリットを見やすく示していただいたが、加茂中学校と北陵中学校以外で小学校に隣接している学校は少ない。小中一体型であっても、統合して進めるのか、現状を活かしながら進めるのか、実態に合わせた一覧表を作るべきである。

また、旧阿波小学校の合併後の地域コミュニティについて伺いたい。

（委員）

地域の方からは、阿波小学校が廃校し、子どもの声が聞きづらいとの話があった。

また、子どもの数はIターンの方もいて予定していたより少なくならなかった。津山市の施策や阿波の方の尽力によるものだと思う。

小中学生はバスで一緒に通学しているのでコミュニケーションもとれ、中一ギャップは少ないのではと考える。

(委員)

小学校がないことで近隣から子どもの声が聞こえないことは寂しいが、小中一貫型小学校中学校も義務教育学校も施設分離型が許容されているので、それぞれの学校を残しながら、オンラインでつないで授業を行うことも考えられる。

大学も2年半の間オンラインで授業を行い、世間ではN高校、スタンフォード大学のオンラインハイスクールなどが一定の存在感を発揮している。対面とオンラインを併用する形で、小さな学校も残しながら、授業はオンラインで行うハイブリッド型も検討すべきではないかと思う。

統合するかしないかではなく、学校としては1つの義務教育学校として分離型であるという、第三のオプションが今は可能ではないかと思う。

オンラインの学校が次々にできている中で津山が先端に行くという意気込みがあってもいい。

(委員)

オンラインはアイデアとしてはありだと思う。

また、小学校と中学校の文化の違いが大きい中、これまで小中連携に取り組んできたが、結果が見えづらい。小中一貫型小学校・中学校や義務教育学校は、一歩先に行く可能性はある。

保護者が子どもの教育環境や将来を見据えて考えるとき、地元に残って通うことが果たして可能なのか。

児童減少がある一定量を超えると保護者は地域を出て行く。地域の方は学校を残してほしいという強い気持ちを持っているけれども、保護者が自分の子どもの教育環境を考え、将来的な高校を見据えていくときに、ここに残っていて通うことが可能なのかどうなのかという課題があると考えている。

さらに、学校を統合してもまた統合先で小規模化が進むという、負のスパイラルがどんどん出てくる。新たな施策や魅力を深めていきながら地域を残す方策も検討する時期ではないか考える。

(委員)

小規模校だけではなく大規模校の課題はないか。

(委員)

適正規模を超えていけば小規模校に見られない課題も出てくる。

(委員)

飯塚市の学校は、元々あった学校を一貫校にしたのではなくて、小中学校を新設して一貫校にしたのか。

(事務局)

学校は一体型とあるが、同じ敷地内に小学校と中学校がある。

また、あえて義務教育学校を選ばず一貫型の学校にした理由は、校長に過度な負担を掛けたくないためとのことだった。

(委員)

新設された学校は、児童生徒は学校を選んで来ているのか。それとも学区で来ているのか。

(事務局)

当該校の選択型、自由学区制度の有無について改めて確認する。

(委員)

津山であれば弥生小学校と北陵中学校をイメージしながら、その二つが統合したら高田小学校はどこにいけばいいのか。子どもたちが学校を選ぶときにシミュレーションを行えたのかを飯塚市に尋ねたい。津山では複数の小学校と中学校がつながらなければならないのか。中学校の下部組織として、ヒエラルキーを作って統合するのか。

連携することがメリットと聞いたが、連携する仕組みをつくるにはどうしたらいいのか。

(委員)

飯塚市が一貫校になっていった経緯は、津山市の参考になる。

新しい制度の施設を市内の特定の地域に適用していくには、まだ情報が不足している。教職員数等の不足部分を表に加えていただきたい。

〈 休憩 〉

協議 (2)

(委員)

提言書案について事務局より説明いただきたい。まず、先ほど協議した体制整備の方策である第3章から始めたい。

【事務局説明】

○第3章素案

- ・基本的な考え方として、小中連携、学び合い、地域とともに、の3つを柱とする。
- ・過小規模校、近隣小学校との統合、小中一貫型小学校・中学校、義務教育学校のメリットデメリット
- ・学区

(委員)

小中一貫型小学校・中学校と義務教育学校の違いは、教職員組織の一体化の有無や通学距離など、わずかな差異である。2つに分けて記述したときに文言が違いすぎることを危惧するので、2つの学校の形態の違いがわずかで、ほぼ同じであるという記述に改めていただきたい。

また、第3章は、学校教育の体制整備の方策一覧を具体化する記述にしてほしい。

次に、困難だと思うが、小中連携、つながり学び合い、地域とともにという視点を入れた記述にすること。

さらに、視点を変えればメリットはデメリットにデメリットはメリットに解釈可能となる記載が必要である。

また、次回の会議までに各章における意見を、委員からフィードバックしてもらうよう依頼する予定である。

(委員)

過小規模校、小中一貫型小学校・中学校など、不登校問題等のデータを記載すべきではないか。

(委員)

データがあると信憑性が増す。

また、統合するパターンが混在してしまい、地域で協議する場合に当てはまらない場合も考えられる。

(事務局)

文科省の義務教育学校の資料で示されている、一体型と併設型は検討の必要があると考えるが、分離型は実際には見られない。

(委員)

現状で義務教育学校に分離型がないからといって最適解にならないわけではない。オ

ンラインでつなぐのがよいとなれば分離型も十分機能すると思われる。

(委員)

津山市の課題の解決の方策は、それぞれの地域で違ってくる。図の活用、データの活用が必要である。

(委員)

各小中学校は、支援学級についても記載した方がよいのではないか。区分があるのかどうか。東中は院内学級もあるので、これらも示してほしい。

(委員)

小中一貫型小学校・中学校や義務教育学校における特別支援学級の設置数はどうか。小規模校でもクラスはある。統合されても設置されている。

(事務局)

次回までに調査する。福岡県では特別支援学級が6学級ある。

(委員)

支援学級がもともと6学級あったのか、増えたのか。一体型になったので増えたわけではないと思われる。

(委員)

小中連携には各学校独自で取り組んでいる。市教委において取組を把握しているのであれば、具体的なビジョンが見えてくると思われる。中学校には複数の小学校から入学してくるが、現状をプラスすることで1 + 1が2になるのではなく、4にも5にもなる。

(委員)

小中連携についても提言書に記載する方向でご検討いただきたい。

(委員)

地域の方にとって参考になる資料となる第3章について、課題を解決するために地域の方に説明をする必要がある。魅力ある学校を念頭に置きながら、課題を示すデータを加えることができればと思う。

(委員)

次に第1章、第2章について説明いただきたい。

(事務局)

○提言書構成(案)について

・第4章を割愛し、3章立てに変更

○第1章について

・本市の目指す教育の中で、国や県の動向の部分を割愛

○第2章について

・魅力ある学校づくりとして、小中連携、学び合い、地域とともに、を柱に第3章につなげている

(委員)

提言書構成案について、第1章では、本市の現状と課題を6点にまとめ、第2章では時代の進展に対応したという部分をつながり学び合うことを保障する学校づくりに変更してもらい、3つの視点から魅力ある学校づくりを進めるとした。

これらについて意見を頂戴したい。

(委員)

第1章の課題である自己肯定感の内容が第2章では網羅されていない。第2章の(2)に入ると思われる。

(委員)

第2章にはICT、地域連携、民間企業、学び合いについて触れられており、議論内容も盛り込まれている。第2章の熱を第3章に盛り込んでもいくべきではないか。津山市として魅力ある学校を目指すことを記載するのはどうか。

(委員)

もう少し、義務教育化、小中一貫型学校化をクローズアップするということか。

(委員)

多様な意見をしっかりと入れて行くなかで、その部分が入ればと思う。第2章の津山市の目指す学校づくりを熱く語ったあとに、それを受ける第3章が、学校種を無機質に羅列するだけでは足りないのではないか。

(委員)

一体型で複数の小学校を統合する場合と統合するが分離型でそれぞれの学校を残す両方のオプションがある中で、義務教育学校化、小中一貫型小学校・中学校化していく

ことを提言するのはどうか。両方のオプションを示さない形では心配。選択肢を限定するのではなく、地域での話し合いの参考になればと考える。

ただ、言われるとおり選択肢を羅列することだけではおかしいのかもしれない。意向に添えるようにしたい。

協議（３）その他

（事務局）

前回の宿題であった第１章と第２章を、また第２章と第３章を明確に、さらに小中一貫型小学校・中学校と義務教育学校の違いを明確にすることを指摘いただいた。次回第１章から第３章までを修正し提示したい。

- ・第６回検討委員会の日程 ８月２日（火）１０時開会
- ・第７回検討委員会の日程 ８月２６日（金）で調整中
- ・提言書構成案、第１章から第３章に対する意見を７月１５日（金）までに事務局へ提出依頼

閉会